

## 書 評

## 荒武賢一郎 編 『近世日本の貧困と医療』

本書は、2015年12月の東北大学東北アジア研究センター開催のシンポジウム「東北アジア地域研究の新たなパラダイム」のセッション「歴史資料の保全と活用—19世紀日本の村落社会と生命維持」における報告をもとに、コンパクトにまとめられた論文集である。収められている論文は、以下の5本である。

- 第1章 近世日本の貧困救済と村社会  
／木下光生
- 第2章 近世日本の「俗医学」と医薬市場の空間  
／スーザン・バーンズ
- 第3章 天草諸島の人口増大と産業の形成  
／荒武賢一郎
- 第4章 山野からみた明治維新／渡辺尚志
- 第5章 コレラ流行と「自衛」する村落社会  
／竹原万雄

このうち医学史と直接的な関わりが深いのは、第2章と第5章ということになる。第2章は、在村医療についての近年における研究の進展をふまえつつ、さらなる研究課題として「庶民がいかに自分の体を理解していたか」を明らかにすることを志向している。その際、M. E. Fissell, *Vernacular Bodies: The Politics of Reproduction in Early Modern England* (Oxford, 2007) の「俗的身体 (vernacular bodies)」から着想をえた「俗医学」という概念を用いているが、これはたんに庶民の「民間療法」ということではなく、専門家として台頭しつつあった医師たちの知識・治療を、庶民たちがどう理解・利用していたのかという「相互作用」に注目するものである。具体的には、医師たちと庶民たちを媒介するものとして、19世紀前期、文化・文政ごろの市販薬のチラシの効能書などが分析されている。

第5章は19世紀後半、明治になってからの宮城県牡鹿郡におけるコレラ流行を扱っている。内

務省衛生局や各府県によって発行された『流行記事』はしばしば見られるものであるが、郡レベルで残っているものとしては稀少な『牡鹿郡流行記事』が、主要な史料として使われている。これまでのコレラをめぐる社会史的研究では、防疫を推進する側の行政や医師と、それに反発する地域住民という対立構図が用いられることが多かったが、本章は、コレラ流行時の通行遮断に注目しつつ、こうした対立構図ではとらえきれない村落社会の「自衛」の試みに焦点があてられている。

この他の3つの章についても簡単に紹介しておこう。第1章では、まず大和国吉野郡田原村(現・奈良県宇陀市)に残された宗門人別帳などをもとに、18世紀末から19世紀中期にかけての世帯の破産と「夜逃げ」の数量的把握が試みられている。そのうえで、村内で困窮した世帯にたいし、どの程度の公的救済が施されていたかが追究されているが、本章の分析結果はなかなか陰鬱なものである。公的救済は限定的であり、被救済者は何らかの制裁の対象となってしまうなど、現代にも通ずるような「自己責任」社会だったという。

第3章は18世紀から19世紀にかけての現・長崎県天草諸島に注目している。非農業部門を含む多様な生業、山野河海を活用した村人たちの「生活力」を跡づけることで、耕地面積にたいする「過剰人口」のために貧困が蔓延していたとする一方的な悲観論を再考している。食料・燃料・肥料・建築用材などを得る場として、山野が人びとの生活にとってきわめて重要だったことは、それまで共同利用されていた山野の行政上の帰属や所有のあり方が明治維新时期に再編されるなかで勃発した山形県の狸森・長谷堂両村(現・上山市)の領域をめぐる係争の事例をつうじて、第4章でも論じられている。

いずれも綿密な史料調査にもとづく研究である

が、それぞれの問題関心はけっして狭い専門領域に留まるものではない。研究成果のエッセンスがコンパクトにまとめられているので、近世から近代初期にかけての日本における、医を含む人びとの生活の諸相に興味をもつ一般の読書人も手に取りやすい一冊となっている。もちろん、それぞれ別々の事象、別々の地域についての研究の成果をコンパクトにまとめた論集であるので、タイトルにある「近世日本の貧困と医療」の総体像が、本書から直ちに浮かび上がるわけではない。しかし本書に収められている地域事例は、他の地域はどうだったのだろうかという想像力をかき立てる。

また、とくに第1章と第2章では、イングランドをはじめとするヨーロッパにかんする研究動向も意識されており、外国史・比較史に関心がある

読者も、知的刺激を受けることができるであろう。それぞれの時代・場所において、人びとをとりまく世帯、地域社会、市場、公権力などの領域がどのように交差し、医療が必要なときや貧困に陥ったとき、自助、相互扶助、公助などがどのように構成されていたか、人びとにどのような選択肢があったのか／なかったのかを問うことは、いま世界的にも重要となっている。本書には、近世日本についてそれらを考える糸口がいろいろ含まれている。

(永島 剛)

[古今書院, 〒113-0021 東京都文京区本駒込  
5-16-3, TEL. 03 (5834) 2874, 2019年2月, A5  
判, 112頁, 3,800円+税]

## 岡田靖雄 編著

### 『もうひとつの戦場——戦争のなかの精神障害者／市民——』

本書の編著者である岡田靖雄氏の歴史探求を方向づけたのが、1958年にだされた立津政順の論文「戦争中の松沢病院入院患者死亡率」との出会いだったという。かけだしの医師だった岡田氏は、東京都立松沢病院で男子部医長だった立津のすすめで「不潔病棟」と通称されていた男子病棟を（通常は1年交代であったのを自ら希望して）4年間も担当する一方、当病院に長らく在職していた病棟主任の「北さん」（北島治雄看護長）が語る戦前からの病院の歴史に熱心に耳を傾けた。「北さん」の語りは、やがて「癒えざる者の声」として1960年に出された『日本残酷物語』に所収される。これが岡田氏による精神科の歴史記述の最初のものだった。1964年3月の精神障害者によるライシャワー大使刺傷事件から間もない時期に出版された、岡田氏編著の『精神医療—精神病はなおせる—』（第1版、1964年7月）には、「われわれは戦中戦後について語るべきあまりにも多くのことがあるのを知っているが、いまはそういう悔恨の苦しみをのりこえて、現実に関心する今日時点で精神科のために何をなすべきかについて語るこ

とをいそがねばならない」（同書第4版、1969年、41頁）という、それからおよそ半世紀後の本書の出版を予告するような記述がある。だが、その後、『私説松沢病院史』（1981年）などでも戦争中の病院事情は詳しく書かれたものの、表面からは見えないマグマのような形で岡田氏の内部で渦巻いていただろう「戦時中の精神科医療についての関心」は、地上への噴出口を長い間見いだすことはなく、次のステップへの飛躍に備えて、寡黙な状態を保っていたように思われる。

以上のような意味で、戦争、とりわけ太平洋戦争と精神障害者との関わりは、岡田氏の精神科医療史研究の原点かつ推進力となってきたテーマであるが、本書は数十年間にわたって温存されていたこのテーマを、21世紀になってから徐々に具体的な研究成果として結実させ、現時点までに刊行された論文などを基盤にしてまとめられたものである。

本書の構成を簡単に説明したい。上記の岡田氏の問題意識などを記した「序説」につづいて、第1編「精神障害者の受難」は、第1章「入院患者